



Title	上顎apical baseの計測学的, 形態学的研究
Author(s)	岩崎, 重信
Citation	大阪大学, 1967, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/29482
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について 〈/a〉 をご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏名・(本籍)	岩 崎 重 信 いわ さき しげ のぶ
学位の種類	歯 学 博 士
学位記番号	第 1 2 9 6 号
学位授与の日付	昭 和 4 2 年 1 2 月 1 2 日
学位授与の要件	学位規則第 5 条第 2 項該当
学位論文名	上顎 apical base の計測学的, 形態学的研究
論文審査委員	(主査) 教 授 滝本 和男 (副査) 教 授 西嶋庄次郎 教 授 河村洋二郎

論 文 内 容 の 要 旨

歯科矯正治療のみによって, apical base の大きさや形態の改変を試みても, それが, 極めて困難であることは広く知られている。

ゆえに, 矯正臨床に際して, あらかじめ, 患者の歯根尖端の配列状態を, できるだけ正確に知ることが, 診断, 治療方針の決定, 予後の判定にきわめて重要である。

しかし, 歯根は, 顎骨内に植立しているため, その配列状態を生体において, 正確に観察, 計測することは, きわめて困難であり, 現在まで, apical base に関し, 数多くの研究が報告されているにもかかわらず, 計測学的, 形態学的に十分に明らかにされたとはいえない。

本研究は, この点を解明するため, 新しく, 隣接歯の根尖端間距離, apical base の弧長, 長径, 幅径などを明らかにしようと試みたものである。

そのため, 歯科矯正臨床に, 特に重要である上顎の apical base を, 水平面に投影して観察する方法として, あらかじめ, 中切歯より第 1 大臼歯にいたる各歯槽高底に, 直径 0.8mm の鋼鉄製ベアリングボールを挿入し, 同時に, 脳頭蓋・顔面頭蓋の必要な各計測点には, 直径 0.5mm の鉛薄板を固定した, 乾燥頭蓋骨 32 個の Camper 基準頭部 X 線規格垂直写真を撮影した。

この写真をもとにして, 上顎の apical base の細部の観察や計測をおこない, この計測成績に統計的処理を加えた。

apical base の形態の分類には, 目測による観察者の影響をさけるため, 研究成績に基づいた apical base の形態の特徴を比較的把握しやすい, 犬歯の位置に重点を置いた分類法を考案した。

さらに, 上顎の apical base と, 脳頭蓋・顔面頭蓋の各長径, 幅径相互間の相関関係を調査した。研究成績の概要は次の通りである。

apical base の各隣接歯牙の根尖端間の距離は, 部位によって, それぞれ異っていた。すなわち, 1~1間 8.6mm, 1~2間 5.4mm, 2~3間 7.3mm, 3~4間 5.4mm, 4~5間 6.1mm, 5~

6間9.2mmであった。それらの中でも1~2間は、他の部位に比して、各個体に共通して短かく、しかも変動が少なかった。

apical base の弧長の平均値は72.3mm、標準偏差は4.5mmであった。

apical base の長径および、幅径の計測の結果、apical base は、幅径において、より個体変動が大きいことが判明した。

apical base の形態は、次の3型に分類できた。1) 楕円形または、拋物線形的なもの、23例(約74%) 2) 方形的なもの7例(約23%) 3) 尖形またはV字形的なもの1例(約3%)で、楕円形または拋物線形的な形態が、多数を占めていた。

また、apical base の配列のバラツキからみれば各歯根尖端の位置は、頬舌的、または、唇舌的に転位することは、少ないことが判明した。

apical base と、脳頭蓋・顔面頭蓋の相関関係は、幅径相互間の組合せにおいて、3~3 width は、zy-zy width, fmt-fmt width, po-po width, の各幅径と高度の相関を有し、zy-zy width は、上述の3~3 width の外に、4~4 width と、6~6 width と高度の相関を有していた。

これに反し、各長径相互間の組合わせにおいては、各計測値間に相関は認められなかった。

上記、研究結果により、apical base の細部の様相、さらに、apical base と脳頭蓋・顔面頭蓋の相関関係を明らかにすることができた。

論文の審査結果の要旨

本研究は上顎 apical base について、計測学および形態学的に研究したものであるが、従来ほとんど知られていなかった上顎 apical base について重要な知見を得たものとして価値ある業績であると認める。よつて本研究者は歯学博士の学位を得る資格があると認める。